

方言とアイデンティティー ―“自分らしさ”の拠り所としての方言―

高野 照司(北星学園大学)

「アイデンティティー」という概念

札幌市の北星学園大学で教えています高野照司と申します。今日は、「方言とアイデンティティー ～“自分らしさ”の拠り所としての方言“」というタイトルでお話したいと思います。

そこで、皆さん。この「アイデンティティー」という言葉にどの程度、馴染みがおありでしょうか。ちょっとわかりづらいといえますか、昨今、私たちの社会のグローバル化がどんどん進み、日常生活のなかでも「アイデンティティー」という言葉が以前にも増して、より頻繁に使われるようになってきている気がします。私も講義などで、数年前までは、「アイデンティティー」という言葉の意味がなかなか難しく、学生にはあまり使わないようにしていましたが、最近は「アイデンティティー」と言っても、ちゃんと理解してくれるような、「アイデンティティー」という借用語が、カタカナ語として日本語に馴染んできているような気がします。

ただ一方で、使い方や解釈が人それぞれ違うといえますか、ちょっと漠然とした曖昧な言葉であることも、この「アイデンティティー」という概念の問題かとも思います。一応、これは軸になる概念ですから、少し学問的におさえておきたいということで、言語学や方言学ではなく、その本元であろう社会心理学の文献などを紐解いてみました。

社会心理学の分野では、「アイデンティティー」というカタカナ語は、生半可には使わないようで、「自己観」という言葉で表現されています。文献を読んでいますと、自分が思っていたよりも、もっと複雑で多義性があり、多重構造を備えた概念で、どうやら2系統の「自己観」、つまり、西洋的と言われる「相互独立的自己観」と東洋的(アジア的)と言われる「相互協調的自己観」があるようです(高田他 1996)。また、異文化間差異だけでなく、同じ文化内でもその「傾向性」に揺れがあるらし

く、日本人であれば、皆同じアイデンティティーかといいますとそうではなく、少し西洋志向のアイデンティティーを持つ人がある。例えば、「個人は他者から分離しており、他者から独立して独自性を主張することが大事だ」と思っている自分を意識している人がいるということです。これはよく「自分の主義主張をしっかりと持ち、自分の言いたいことははっきりと言うべきだ」という“典型的な”西洋人などの考え方としてよく言及されますが、そのような個別独立的な、比較的固定的なアイデンティティーです。つまり、「誰が何と言おうと、私はしっかりと自分の意見を持っている」というアイデンティティーの持ち方です。

世間一般に私たちが思うアイデンティティーとは、まさしくこれに相当するだろうと思っていたのですが、別な傾向性もあるようで、それは東洋(アジア)的なアイデンティティーで、「相互協調的アイデンティティー(自己観)」です。「個人は互いに結び付いていて個別的ではなく、さまざまな人間関係のなかにおいて、そのなかで自己がつけられていく」という意識の持ち方です。つまり、相手が誰かによって、自分自身が少し揺れ動くということです。自分のアイデンティティーみたいなものを確固として常に持ち、それを基にことばを使って対人関係を築いていくのではなく、多少自分も柔軟に構え、相手が誰かによって自分自身が変わりゆく可能性もあるという、もう少し複雑で流動的な概念であることがわかってきます。

先ほどから申し上げているように、例えば、日本人であっても、人それぞれ少し西洋寄りのアイデンティティーの方に傾いている頑固な方がいたり、もう少し柔軟な考え方を持って生きている人がいたりします。ですから、一種、連続性を備えた概念でもあります。どちらか一方に属するということではなく、異文化間で、あるいは一文化内においても、どちらかが少し優勢だ（あるいは、優勢でない）という捉え方をするということがわかってきました。

ことばとアイデンティティー

私の専門である社会言語学のなかで、「ことば」と「アイデンティティー」の密接な関係を解き明かそうという試みはこれまでなくはないですが、非常に扱いが難し

いといひますか、まだまだ議論が熟していないというのが現状です。

出だしは、おそらくロバート・レペイジというイギリスの社会言語学者が、1960年代に「Acts of Identity」、敢えて日本語にするならば、「アイデンティティー（表示）行為」、言語は自分のアイデンティティー（自己観）を表示・表現・主張するための非常に大切な道具である、重要な手段であるということを言いました(Le Page & Tabouret-Keller 1985)。

ということかと言いますと、好きな人や尊敬する人のように自分もなりたい、そういう人になりたいという欲求があれば、そういう人と同じような話し方をしていく、そういう人たちに近づこうと思ひ、おそらくは無意識的に、時には意識的にそうすることもあるかもしれませんが、ほとんどが無意識的に同じようなことば遣いになっていくということです。ただし、それは必ずしも恒久的にはではなく、そのときの気持ちの持ち方で、瞬間瞬間で異なる場合もあります。ある時に、素晴らしい人と出会い、その人にすぐく影響を受けて、その人と話しづりが段々似ていくような人がいたり、アイデンティティーの在り方と同様に、そこから影響を受けることば遣いもしばしば流動的で、決して固定化されたものではありません。

ですから、俗に言うところの「仲間意識」「ある人、ある集団への忠誠心」みたいなものが、「アイデンティティー」とことばの関連を解きほぐしていくなかで重要な意味を持ちます。例えば、いつの時代も若者は「若者ことば」を創造します。やはり、仲間と同じように集団をもり立てていきたい、集団のなかに自分がいることを確認したいという欲求から、「若者ことば」を創造していくわけですから、若者ことばを作るという行為も「アイデンティティー行為」ということになります。

そうなりますと、対人関係の構築に必須な「ことば」と「アイデンティティー」の関係は、どちらかというとは者依存的で相対的に定まるものであり、決して絶対的に固定化されるような代物ではない。その関係は、固定的、静的なものではなく、流動的で可變的だということになります。ことば遣いもすぐく揺れますし、変わります。アイデンティティー自体もそんなことばと同様、状況に応じてすぐく揺れ動くものだということになります。

ことばとアイデンティティー：先駆的研究

そうなりますと、「アイデンティティー」と「ことば」の関係を捉えることは、なかなか難しいことになります。残念ながら、これまで、研究の数は本当に少ないのが現状で、私自身も興味を持ち、やり始めましたのはいいのですが、なかなか一筋縄ではいかないということに徐々に気が付き始めました。

過去の研究はそんなに多くありませんが、例としていくつか先駆的な研究を紹介させていただきます。海外では、イギリスのジェニー・チェシャー(Jenny L. Cheshire)という研究者が、イングランドのレディング市にある、あまり治安のよろしくない、無職の若者がたくさん時間を持て余してたむろしているような広場をフィールドにして調査を行いました。ただ彼女は、「アイデンティティー」そのものを調査したり計ったわけではなく、各被験者がどれだけ土着文化に根ざしているか、つまり、その地域の文化に生活が根ざしているかということを、「土着文化指数」と呼ばれる指標に換え、その指標とことばの使用上の揺れとの相関関係を見極めていきました(Cheshire 1982)。

どのような質問をして指標にしていたのかと言いますと、すごく犯罪率が高くて治安のよくない地域でしたので、「ケンカは好きですか」「ケンカが強いのは誰ですか」というような質問で調査をし、後者の質問については、名前がたくさん挙がってきた人にポイントがたくさん加算されるといった具合です。被験者の犯罪歴や「凶器を持ち歩いているか」なども指標に変換して、どれだけその地域の土着文化に、各被験者の生活が密着しているかということを示す指標としました。

そして、言語使用を見てみますと、例えば、非標準的な用法となる“you was”とか“we does”。それは“you was”ではなく、“you were”ですよね。“we does”ではなく、“we do”ですね。英文法に詳しい日本人からしますと、「何、これ？」という非文法的な英語を、実は社会階層によってネイティブ・スピーカーも使うわけですが、そうした非標準的な用法との正の相関関係が明らかになりました。つまり、土着文化に根ざしている生活をしていればいるほど、このような非標準的な、その土地固有の用法を使うことがわかってきました。

もう一度言いますと、「アイデンティティー」そのものを調査しているというよりは、「土着性の度合い」です。土着性とは、アイデンティティーをつくり上げるうえで、とても重要な要因ですから、それを指数にして、表現して、ことばとの密接な関わりを見たということです。

一方、日本国内に目を向けますと、談話研究だとそれなりにあるのですが、社会言語学、ことばのバリエーションや変化の研究、そして方言学のなかではほとんど見受けられません。そんな中、ダニエル・ロング氏は、地方から京阪地区に進学をしてくる大学生に、「どれだけ地元の方言を維持していますか、使い続けていますか」という質問を投げかけて、被験者が「自分のお国訛りに対して、どれだけ誇りを持っているか」を指標にし、方言使用との相関関係を調査しました。自分のお国訛りにどれだけ誇りを抱いているのか。それもまたアイデンティティーの重要な構成要素の一つです。自分の言葉に誇りを持っているのかどうかということ。そして、出てきた結果としては、自分の出身地方言に強い誇りを持っていればいるほど、自分の出身地の方言を、京都や大阪に転居しても使い続けることがわかりました(ロング 1990)。

以上のように、「アイデンティティー」と「ことば」の関係について、そんなに多くの研究成果の蓄積はありませんが、一般論として、地元への愛着、忠誠心、誇り、地元根ざした社会生活は、当然、地元志向のアイデンティティーが構築されていき、その土地固有の方言を維持したり、使用を促進したりすると言えるわけです。これまでの社会言語学的研究のなかで、そうした関係性が一般論と言えるかと思います。

北海道方言と道産子の方言意識

私がこれまで行ってきた、まだまだ発展途上の研究ですが、今日は、わかったところまでをお話ししたいと思います。

私のフィールドは北海道です。北海道の方言は、共通語化が完了したと思われてしまったのか、1980年代頃までは、国立国語研究所が北海道の方言の共通語化を熱

心に、大規模に研究していましたが、1990年代あたりから、ぱったりとやらなくなってしまいました。方言の研究者からすると、「北海道のことばを研究しても方言色が薄いから、たいして面白くないよね」といった感じでしょうか。確かに方言色は薄く、東北を飛び越えて関東の言葉にかなり近いというふうに過去の方言調査では記述されていたりします（真田・ロング 1997）。

北海道方言話者、特に北海道で生まれ育った人間のことを道産子といますが、私も道産子で、特に外住歴のない道産子は、「自分が方言話者だ」という自覚がほとんどありません。多くの道産子は自分が共通語話者だと思っています。

ちょうど1カ月ほど前でしょうか。北海道方言が広く全国メディアで話題になりました。普段、めったに話題にされることのない北海道方言が注目されました。そうです、「そだねー」の話です。これを受けて、平昌オリンピック・カーリング日本女子代表チームの藤澤五月選手は、とあるニュースのインタビューで、「自分が方言を話すとは衝撃的出来事だった」とおっしゃっていました。同じ道産子として、やはりそんな感覚だろうなと思いました。

図1 道産子の方言・共通語意識（佐藤・米田 1999 より）

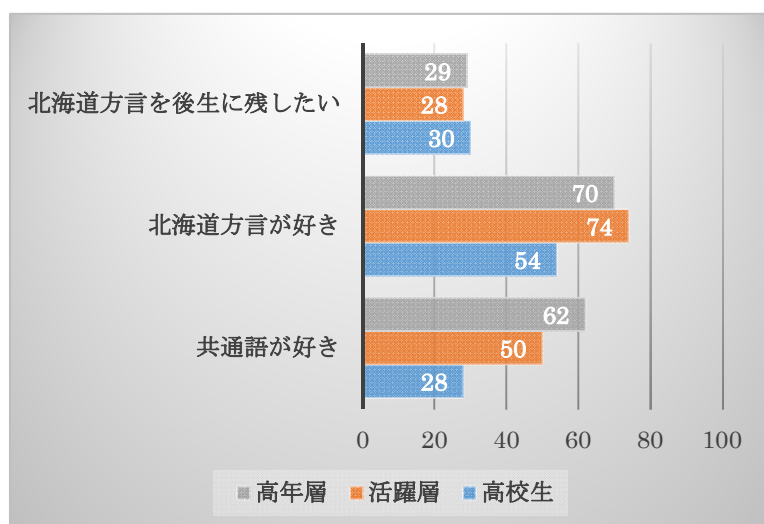


図1をご覧くださいと、道産子の方言に対する態度や考え方は、残念ながら、すごく“薄情”なことが分かります。「北海道方言を後世に残したい」とは、ほとんどの

人々は思っていないといえますか、どの世代でも3割以下であることが分かります。先ほどから申し上げているように、自分のことばを方言だとはあまり思っていませんから関心も薄いのでしょう。方言話者であれば、共通語に憧れたり、好きだと思いうのかもしれませんが、若い世代に行くほど、「共通語が好き」な人たちも3割弱ぐらいしかいません。一方、「北海道方言が好きか」という問いに対しては、「好き」が多数派です。これは、道産子は概して北海道に住むことを好み、うちの大学の学生なんか就職で道外には出たがらない、道内志向が圧倒的に強いので、その辺りの嗜好と合致したものだろうと思います。いずれにせよ、日本国内の他地域と比べ、郷土のことば（方言）に対する愛着は極めて薄い土地柄であるという調査結果がこれまで提示されています（佐藤・米田 1999）。

道産子は北海道方言を残したいと思っているわけではなく、かといって、東京の人たちようにしゃべりたいという話でもありません。そうすると、「ことばとアイデンティティー」を研究しようと思っても、北海道方言はあまりいい調査対象にはならないということになってしまいますね。しかし、そんな土地でこれまで研究をしてきて、意外にそうでもないということが分かってきましたので、今日はその辺りのお話をさせていただこうと思います。

北海道方言の特徴

ここで少しだけ、北海道方言の特徴のお話です。「手袋をしたり、はめたりする」ことを「手袋をハク」と言います。語彙の面では、「(ごみを)捨てる」ことを「ナゲル」と言ったり、「冷たい」ことを「シャッコイ」と言ったりします。私の子どもはまだ小さいのですが、「くすぐったい」ことを「コチョバイ、コチョバイ」と言っていますので、これは若い世代にもまだまだ残存している北海道方言の一つです。

文法面では、「勉強しろ」ではなくて「勉強スレ」とか「勉強シレ」などと言います。それを我が子に言ってみたところ、「何それ？」と聞き返されたので、これは廃れてきている方言だろうと推察できます。

音声のアクセント面では、例えば、「セナカがかゆい」の「セナカ」は○●●▼のよ

うに平板型アクセントが共通語式ですが、北海道方言では「セナカが」(○●○▽)というように中高(なかだか)になります。それから、「スガタが美しい」の「スガタ」は●○○▽、「カラスが鳴く」の「カラス」も●○○▽と頭高が共通語式ですが、北海道方言では、「スガタが」(○●○▽)」とか「カラス」(○●○▽)」というように中高が特徴的です。他に二拍名詞では、「紙を切る」の「カミを」は○●▽で尾高が共通語式ですが、北海道方言だと「紙を」(○●▽)」のように平板型になったりします。ということで、起伏式と平板式が、共通語と微妙にずれていて、話者自身でも自覚はほとんどありません。

図2 札幌市内で見られる「方言的風景」



図2は地下鉄のドアの貼り紙広告です。「ジョブキタ」という大学生向けの就職説明会で、「見ささる、聞かさる、言わさる」とあります。「えっ、何だ、こりゃ!？」と、初めて見た時はちょっと嬉しくなって、即座に写真を撮りましたが、長いことこうして貼られているように思います。

「～さる」という言い回しは、北海道で話される表現方法の一つで、「意図せずに自然とそうになってしまう」という微妙なニュアンスを醸し出します。ここでは、就職説明会があまりにも面白そうだから、思わず「見ささってしまう」、面白いことを言っているから、思わず「聞かさってしまう」、聞きたくなくても思わず「聞かさってしまう」。どうしても知りたくなって、何か言いたくなって、思わず「言わさってしまう」というふうに、北海道では、比較的若い世代でもいまだに根強く使われている表現です。このようなものが、街角の所々にあったりするのを目にすることで、

「ああ、そうか、自分は方言を話すんだなあ」と自覚する程度の、日頃の方言意識の希薄さです。

それでも脅かされる道産子の方言アイデンティティー

しかし、そんな方言意識の希薄な道産子も、ことばに絡んで自己のアイデンティティーが脅かされるといいますか、窮地に立たされたという経験談が、教え子などからしばしば寄せられます。

例えば、観光客にも人気の高い函館を例に挙げてみます。函館は北海道の中でもかなり方言色の濃い、通称「浜言葉」が使われている地域でして、結構、アクセントの強い北海道方言が話されています。ただ、函館の地元の、特に外住歴のない若者は、自分が方言を話しているとは全く思っていませんから、例えば、進学で札幌へ来て、「サンダルを買ったんだ」、「サンダル(●○○○)」と頭高のアクセントで言ったら、札幌出身のクラスメートから「なにその言い方？」と言われたと。札幌や、おそらく東京でも、「サンダル(○●●●)」と平板式アクセントで言うようですが、『「サンダル(●○○○)、買ったんさ、昨日』ってなんか変なの?」「自分の言葉って何か変ですか?先生」と尋ねてきたりするわけです。私の「社会言語学概論」という講義を聴いて、函館の言葉が方言だということを生まれて初めて、二十歳になってようやく知ったそうです。大人になってから、自分が話すことばとの関連で、こういったある意味、自分のアイデンティティーを脅かされる出来事って結構あります。

さらには、札幌という大都市で生まれ育った学生の話ですが、就職活動で東京にしばらく滞在していたときに、東京出身の仲間ができて、「あのさあ、昨日さあ、私さあ、友達とさあ、ディズニーランド行ったんだよね」などと話していたところ、「なんで、『さあさあ、さあさあ、さあさあ』って言うの?」と、東京出身者に言われて、とにかくすごく肩身が狭くて、「自分は田舎くさいんだなあ」と感じてしまったという苦い経験談を話してくれました。

最後にもう一例。東京の大学に進学した、とある田舎町出身の高校生は、何気なく普段の口調で話していたところ、たまたま近くにいた東京出身の知り合いから「あ

れ? どこ出身? 田舎出身なんでしょ?」とぼっちり言い当てられました。これは私自身の話なのですが、それ以降、なんか寡黙になってしまった自分がおりました。このようなショックな出来事は、実はカーリングの藤澤選手だけではなく、ごく普通の人々の日常生活のなかで、成長して大人になってからもあるわけです。それだけ自分の話す方言（ことば）に対する意識が薄いのです。ただ、今日のグローバル化していく社会のなかで、余所の人と接する機会がどんどん増えることによって、こうした自分のアイデンティティーを問うてみるような出来事に遭遇するわけです。

もし、北海道方言に少しでもご興味がおありでしたら、大修館書店の「WEB 国語教室」(https://www.taishukan.co.jp/kokugo/webkoku/relay002_13.html)に、私が書かせていただいた北海道方言の特集があります。そちらにいらっしゃる二階堂先生も福岡方言についてお書きになっています。無料ですから大修館書店のウェブサイトへ行って、このページを見ていただいて、少しでも北海道方言のことに興味を持って読んでいただければ幸いです。

土着アイデンティティーと方言使用： 実地調査による検証

出身地に根ざした、自分は誰かというアイデンティティーをここでは「土着アイデンティティー」と呼ぼうと思いますが、それが脅威にさらされたような状況で、私たちの母方言はどのような役割を果たすのだろうかということに興味を持ち、実際にフィールドに入って調査をしてみました。¹ そのフィールドとは、ニセコ町(北海道後志管内)でして、今や全国的に有名な町です(図3)。「蝦夷富士」と呼ばれる羊蹄山(ようていざん)を背後に控えた、小さなこじんまりとした、人口は5千人くらいの田舎町です(図4)。

¹ 高野照司(研究代表者)受給の科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究(No.21652040,2009年～2011年度)『急速なグローバリゼーションによる地域方言の変容と話者心理に関する社会言語学的研究』,及び,科学研究費補助金・基盤研究(No.26370496,2014～2017年度)『グローバル化する社会で変容するアイデンティティーと言語変異の因果関係の理論モデル構築』からの助成により行われた。

図3 北海道後志管内ニセコ町



図4 ニセコ町市街地



なぜニセコ町かといいますと、今や人口も 5,000 名より多くなっていると思いますが、世界的に注目されているスキーリゾート地で、世界一のパウダースノーを滑ることができるともいわれており、外客誘致がどんどん進み、近年は土地や水資源

までも買い取るために、外国人や外国企業が押し寄せています。数年前は、地価高騰率日本一ということで話題になったり、最近ものすごく様変わりしてきている町なんです。

これはニセコ地区で最も人気のあるグランヒラフスキー場の中心を通っている「ひらふ坂」の写真（図5）ですが、10数年前までは古めのホテルや民宿などが並んでいましたが、今や、駐車場になったり、ゲレンデに変わってしまったり、大きな様変わりをしています。

図5 ひらふ坂 昔と今

2010年撮影

2016年撮影



図6 グローバル化する「ひらふ坂」の今





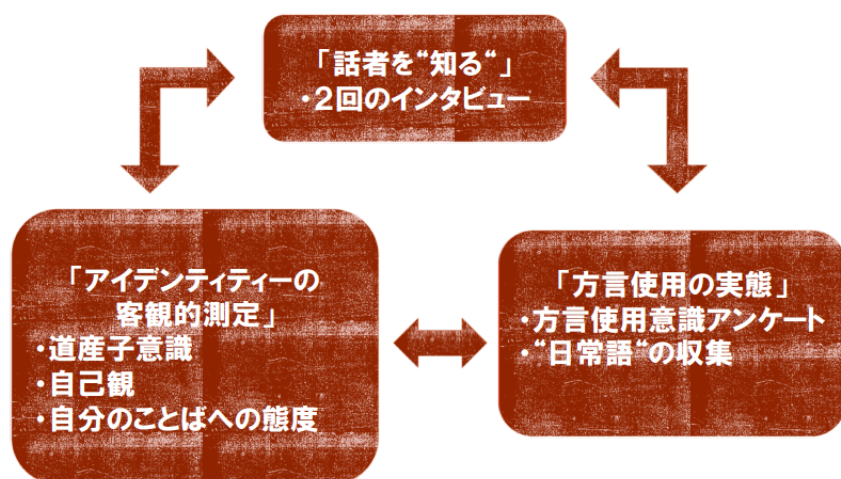
他にも長期滞在型のコンドミニウムがあったり、英語看板のお店が建ち並んでいたり、あたかも外国のスキーリゾートへ来ているかのような雰囲気があります。結構、別荘なんかも、外国人や本州の方々に売られていて、スキー場まで歩いていけるような一等地ですと、1 億円以上の値が付くといった、本当に急激な変化を遂げている地域です（図6）。

ニセコ地区のこうしたグローバル化に対して、ニセコ町の住民の方々はどのような意識を持っているのか、住民の方々の土着アイデンティティーの有り様と地元方言の使用に何らかの規則的な関係はないのか、また、方言使用が人によって様々だとすれば、そうした個人差の中に土着アイデンティティーとの関わりで何か規則性のようなものは見い出せないだろうか、などといった問いをこの実地調査で検証してみようと思いました。

土着アイデンティティーと方言使用の“複眼的”検証

これまでのアイデンティティーと方言の使用に関する研究では、「あなたは（ニセコ）のことばが好きですか」などといった質問をするかと思います。これまでの研究では、それだけを聞いて、実際の方言の使用や方言使用に関する意識との相関を見ました。しかし、色々文献を読んでみると、一個人のアイデンティティーというものは、もっと複雑で、揺れ動き、相対的なものだとなってきたものですから、私は図7で示したように「複眼的検証」を試みました（図7）。

図7 「ことば」と「アイデンティティー」の複眼的検証モデル



アンケートを配布して回収するような「質問紙調査」だけでは駄目です。図7にあるように、いろいろとその人の語りを聞いて、「話者を知る」ことが大事ですから、最低2回、録音したのは2回だけですが、その前にインタビューの打ち合わせでお会いしたり、他の人も紹介してもらったりしますので、そのためにちょっとお訪ねたり、多い方では4～5回は自宅に訪問しました。

右下のボックスの「方言使用の実態」は、一般的な方言調査などで実施されることでもあります。また、「方言使用意識アンケート」のほかに、その方が普段話していることば（「日常語」）を収集しました。ですから、アンケート調査だけではなく、もう少しカジュアルで自然な談話、話しことばも研究材料として集めました。

左下のボックス「アイデンティティーの客観的測定」は、研究者によっていろいろな捉え方ができるのだらうと思います。私自身は、「道産子意識」についてのアンケート調査をしました（植松 2010）。また、冒頭に申し上げました 2 系統の「自己観」を基にしたアンケート調査も行いました（高田他 1996）。さらには、自分のことば、ニセコのことば、北海道のことば、共通語に対して持つ態度も調査しました（Garrett 2010）。

実は、この図 7 には反映させていませんが、もう一つ実施しました。方言を話す人の音声を聞いてもらい、その方言を話す話者についての人物的評価を下してもらうという社会心理学的調査法（ヴァーバル・ガイズ法）を用いました。知性レベルとか親しみやすさ等といった人物像について、方言の音声を聞いて判断してもらうというタスクをやってもらいましたが、まだ分析が終わっていません。

土着アイデンティティーと方言使用の“複眼的”分析結果（中間報告）

いろいろとできる限りの資料を判断材料として、各人のアイデンティティーの所在・有り様を捉える。こうして各住民の方と単発ではなく、何度かお会いして、その方を知っていきますと、ニセコ町のグローバル化に対して、やはり反対の考え方を持っている人がいるということが分かってきます。「自然破壊や土地の買い占め」「外国資本の参入」「よそ者が増える」「街を荒らす」などといった理由からです。一方、賛成派の方もいます。「町が有名になっていいよね、活性化する」「子どもも増える」「街並みがきれいになる」「町の経済がよくなる」などという意見です。そして、「私は興味がないんですよ。あんまり自分と関係ないから……」という人ともいます。中立的な立場をとる人ですね。このようなことが段々とわかってきました。

そうしたグローバル化に対する個々人のスタンスとアンケート調査から分かる方言使用意識を絡めて見てみますと、いくつか興味深いことが分かってきます。

結果を見る前に、このような方言使用意識に関するアンケート調査ですが、例えば、北海道では「とうもろこし」のことを「トーキビ」と言いますが、調査では、「とうもろこし」の絵を示して、方言や共通語的語彙の選択肢を与えて、「あなたはどれ

を使いますか」という質問に回答してもらいます。これは“意識的に”自分がどの方言を使うのか、あるいは、使わないかを答えてもらうものです。

こうしたアンケート調査への“意識的”な回答行為自体が、その人自身の母方言を通した意識的な「アイデンティティー行為(Acts of Identity)」であると捉えることができると思っています。謂わば、方言の使い手としての土着アイデンティティーを公に申告するような行為です。「私は、こういう方言を使いますよ」ということを、私のようなよそ者の調査者に明かしてくれるという、これ自体がアイデンティティー行為だと考えます。

図8 地域のグローバル化に対するイデオロギー（反対派／中立派／賛成派）と
“意識的”アイデンティティー行為（中年層住民）

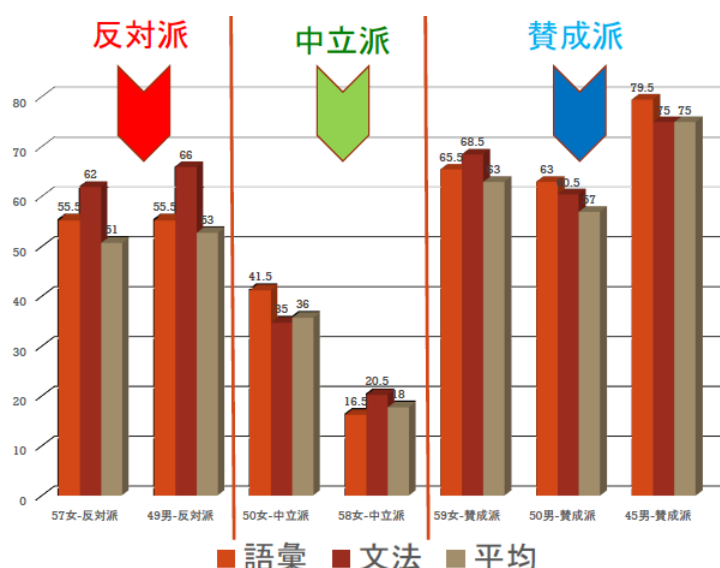


図8は中年層の住民7名についてです。若年層は、どちらかといえば賛成派が多く、老年層は反対派が多い傾向が見受けられました。中年層は、3つのスタンスにうまく分かれていて、ここで短時間で議論する上ではわかりやすいので、ここでは中年層住民だけを扱います。

図8をご覧くださいと、反対派の人々、例えば、「ニセコ町は変わってほしくない」「ニセコ町は今のままであってほしい」と願う人々は、やはり方言もたくさん使う

と申告しています。しかし、「私は関係ない。どうでもいい」「大して町のことに興味がないから」という中立派人々は、方言使用の申告の度合いも少なめです。

このあたりは、過去の類似の研究成果から割と予想できたことですし、特に地元
に愛着の強い、忠誠心のある反対派の住民が、自分は「方言をたくさん使う」と回答
する傾向は、過去の研究でも繰り返し言われてきているので、あまり驚きません。

予想外だったのは、この賛成派住民のパターンです。「ニセコがどんどん変わって
いって、世界的に有名になっていってくれるとすごくいいね」と言う賛成派の人々
は、むしろ反対派の人たちよりも多分に方言を使うと申告しています。「あれっ？ こ
れっていったい何だろう」と思うわけです。「方言を使います」という“意識的”アイ
デンティティー行為は、地域住民の社会変化に対する主義主張と規則的相関が確か
にあります。ただ、驚いたのは、この賛成派の人たちの振る舞いです。どうしてな
のだろうかと悩みました。

グローバル化イデオロギーと自己観から読み解く方言使用

今までの研究では、ここで終わってしまいますが、もう少しその話者のことを深く、
自己観を含めた「アイデンティティー」の複合的内容を捉えていきたいということ
で調査をさらに進めていきますと、図9のようなことが分かってきます。ここで
は、中年層住民の「自己観」について、4つの構成要素（個の認識・主張／評価懸念／独
断性／他者への親和・順応）を散りばめた合計 20 個の質問への回答を数値化し（高
田他 1996）、地域のグローバル化に対するスタンスの持ち方との相関を見ました。

例えば、「個の認識・主張」は、「常に自分自身の意見を持つようにしている」こと
に対して、七つの尺度（“ぴったりあてはまる”～“全くあてはまらない”）で答えます。

「人が自分をどう思っているのかを気にする」という質問は、「評価懸念」にあた
ります。前者に対し、「あてはまる」と答えた人は、先にお話した「相互独立的自己観」
に傾いた自己観の持ち主、後者に「あてはまる」と答えた人は「相互協調的自己観」
寄りの自己観を持つという解釈になります。「独断性」という要素については、「一番
最良の決断は、自分自身で考えたものであると思う」という質問があったり、「他者

への親和・順応」については、「仲間のなかでの和を維持することは大切だと考える」という質問があり、前者が「相互独立的自己観」、後者が「相互協調的自己観」に相応することになります。

図9 地域のグローバル化に対するイデオロギー
(反対派／中立派／賛成派)と自己観(中年層住民)

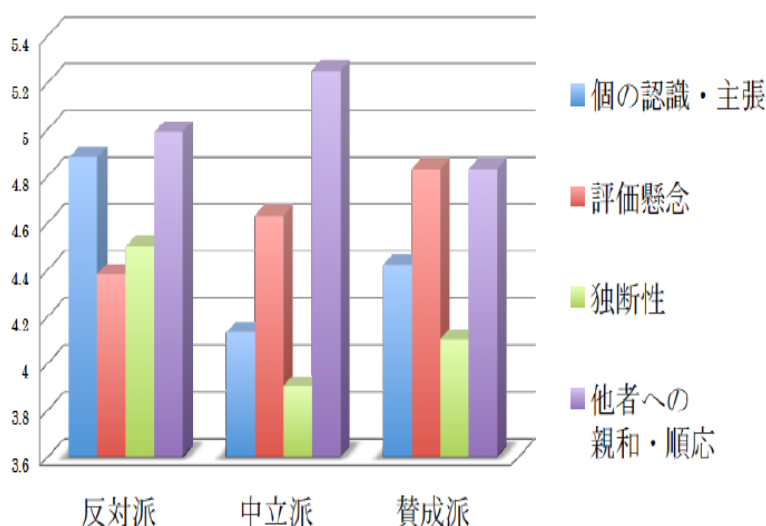


図9から、地域のグローバル化に反対する住民は、「個の認識・主張」「独断性」が他の二つのスタンスをとる住民に比べてすごく高いことがわかります。逆に、賛成派の住民はミラーイメージですが、「評価懸念」がすごく高いようです。つまり、自分が「人にどのように評価されているか」ということをすごく気にするタイプの人たちです。「独断性」や「個の認識・主張」は割と弱いようです。そして、中立派住民は、人とうまくやりたいという「他者との親和・順応」が一番高いという傾向が見られます。

以上のように、「土着アイデンティティー」の重要な構成要素と思われる「自己観」をもう少し詳細に見ていくことによって、どのような意識や動機から方言使用意識アンケートに答えてくれたのかということがパターン化して示されていることになります。地域のグローバル化に反対の立場をとる住民は、内発的で相互独立的、自

分の意見をしっかりと言う自己観の持ち主であることから、グローバル化に異議を唱える信念の表れとして方言の使用をアンケートで公言したということになります。賛成派の住民は、どちらかという、地元への同調志向や逸脱することを恐れるという心理的顕れとして、アンケートで方言使用を公言するという他者依存的、相互協調的な動機付けが中心であることが窺えます。中立派住民はそういったことには拘らず、自分を出さずに流れに身を任せるという傾向になりましょうか。

グローバル化イデオロギーと言語態度から読み解く方言使用

次に、自分のことばに対する言語態度を見てみましょう。4つの構成要素を散りばめた合計16問、各4尺度（“ぴったりあてはまる”～“全くあてはまらない”）を設定したのですが、「北海道方言に親しみを感ずる」といった質問で自分のことばへの「連帯感」、 「自分自身を標準語話者だと思う」といった質問で「標準語意識」、 「北海道方言は標準語と何ら違いはない」といった質問で「威信」、そして最後に「自分自身を方言話者だと思うかどうか」といった質問で「方言話者意識」を見ました（Garrett 2010）。図10は、それらへの回答を数値化したものです。

図10 地域のグローバル化に対するイデオロギー
（反対派／中立派／賛成派）と言語態度（中年層住民）

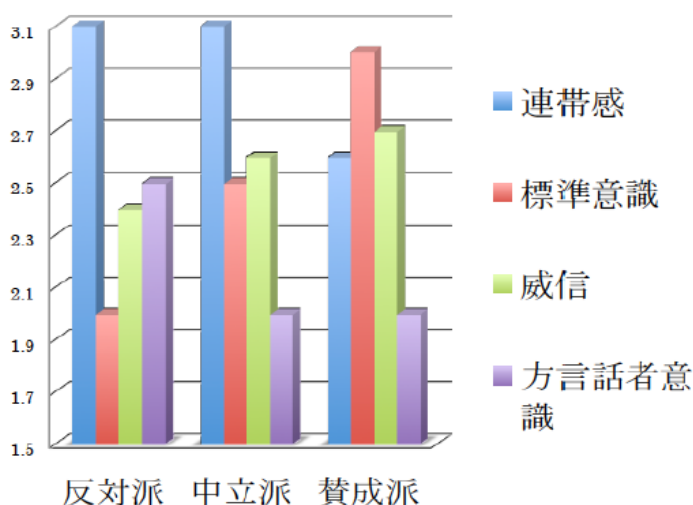


図10から、やはり反対派住民は、すごく自分のことばに対して「連帯感」が強いのが分かります。愛着を持っています。そして、「方言話者意識」が強い、自分は方言話者だという自覚がはっきりとあるわけです。一方で、当然のことながら、自分のことばへの「標準意識」は低いです。

一方、賛成派住民は、三者のなかで最も愛着や「連帯感」は低いです。何が低いのかと言いますと、「標準語意識」が高い、自分のことばを標準語だと思っているわけで、同様に「威信」も強く感じています。そして、当然「方言話者意識」がすごく低いです。中立派住民は、ちょうどこれらの中間ぐらいの数値を示しています。

これらのことから言えることとして、反対派住民の場合は、方言話者としての自覚と、それを守りたいという連帯感や愛着の表れとして、アンケートで高い方言使用を告知するアイデンティティー行為につながった。それと対照的に、賛成派住民の場合は、標準語話者という自意識が強く、その使用をアピールするために高い方言使用を告知するアイデンティティー行為を行ったことになります。地域社会がグローバル化することにより、自分たちのことば（方言）が危機に瀕しているという意識から守りの姿勢で方言使用を訴えているのではなく、社会が変わるとともに、自分の話すことば（標準語）の使用をよりアピールする行為に繋がったのではないかと考えられます。²

“日常語”の揺れに顕在化する土着アイデンティティー

ここまでは、日頃の方言使用に関するアンケート調査の結果を元に、方言使用を意識的に告知するという手段による土着アイデンティティーの表示行為を考えてきました。

本調査では、アンケート調査だけでなく、各住民の方から“日常語”を収集させても

² 発表持ち時間の都合から、次スライド「グローバル化イデオロギーと道産子意識から読み解く方言使用」は割愛した。グローバル化イデオロギーのタイプと道産子意識との間に大きな相関は見られないことから、「郷土愛」などといった広く漠然とした概念では、土着アイデンティティーの表示行為としての方言使用の揺れを説明するに相応しくないという結論に至った。

らいました。私が「話し相手」になったので、100%普段通りのことばとは言えないかもしれませんが、できるだけ普段のことばに近いことば遣いを見ることで、話者自身も気付かない、無意識的な、潜在的な、余所者にはなかなか見せてくれないような、ことば（方言）によるアイデンティティーの表示行為を捉えてみたいと考えました。

“日常語”とは、社会言語学の研究のなかで、非常に重要な概念です(Labov 1972)。「素の自分が出たことば」で、内集団（親しい友人同士や家族内）で使われることばです。また、思春期までに完成する生育地の言葉で、一生涯変わらないものです。私自身は北海道南部の海岸地方の出身ですから、私の本来の“日常語”は、実家へ帰ったときに旧友などと飲みに出たりしますと、おそらく自分の浜ことばが出ているんだろうと思います。そのような私の浜ことばは、一生涯変わらない、染みついたものです。社会言語学のフィールドワーカーは、それをなんとか採りたいということで、話し手が「ことば遣い」ではなく、自分が話している内容にのめり込んでくれるような面白い話題を振って、その話し手の自然なことば遣いを採取していくことを長年やってきました (Labov 1981)。

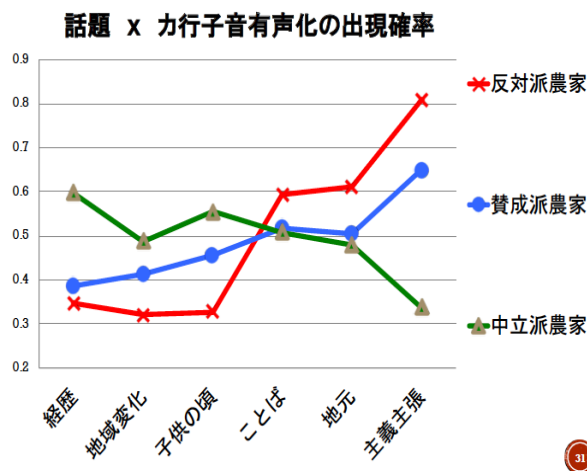
先ほどまでお話していた方言使用に関するアンケート調査は“意識的”な方言使用を尋ねていましたが、“日常語”を見ることで、話し手が無意識的で、その人の本音が反映されたような、余所者には普段、決して見せないようなことばの特徴が見えてくるのではないかという期待です。

そこで何を分析したかといいますと、語頭以外に出てくる「力行子音（かきくけこ）の有声化（濁音化）」です。たまたま観ていた NHK の朝ドラ『ひよっこ』、第 22 話にすごくわかりやすい例がありましたのでご紹介しますが、「泣く」が「泣ぐ」、「泣かない」が「泣がない」となったりします。³ 『ひよっこ』のことばは、奥茨城弁なのだそうです。聞かれる発音のいくつかは、北海道方言でもよく聞かれるもので、そういう音をターゲットに調べました。

³ 『ひよっこ』第 22 話（2017 年 4 月 27 日放送）。主人公峯子と友人時子、三男が、通学途中のバスの中で、上京を翌日に控え、寂しく不安な気持ちを胸に会話をしている場面。

図 1 1 は、グローバル化に対するスタンスが三様（反対／賛成／中立）な、同世代(40～50 代)の農家のご主人 3 名の日常語に見られるカ行子音の有声化を、ことばの揺れの研究によく使われる統計ソフト（Varbrul）を使って解析したものです。この結果から、彼らの日常語に見られるカ行子音の有声化は、彼らが話す異なる性質の話題によって制御されていることがわかります。言い換えると、異なる特性を持つ話題は、異なる影響力を持って、カ行子音の有声化の産出を支配しているということです。⁴ この影響力は、反対派のご主人と賛成派のご主人の日常語において、統計学的にも有意なものでしたが、中立派のご主人の日常語においては、ほとんど効力がない（つまり、統計学的に有意でない）ことが分かりました。

図 1 1 日常語における話題による規則的揺れ：
グローバル化イデオロギーを異にする農家のご主人たち



異なる話題とは、その人の経歴を尋ねたり（「経歴」）、「ニセコがどんなふうに変わってきましたか」という質問をしたり（「地域変化」）、子どもの頃の話（「子供の頃」）や方言のことを聞いたり（「ことば」）、「ニセコのいいところはどんなところですか」「どんなところが好きですか」という質問（「地元」）をしたりしました。そし

⁴ 図 1 1 の縦軸は話題が（語頭以外の）「カ行子音有声化」の産出に及ぼす影響力の指数。「0.5」は、影響力がゼロで、「1」に近づくほど産出を促進し、「0」に近づくほど産出を抑制する。

て、そうした数々の話題の中で「町のグローバル化に対してどんな気持ちを持っていますか」という話題（「主義主張」）も投げかけていくわけです。

反対派のご主人ですが、「土着アイデンティティー」に深く関わるような話題、つまり、ことば（方言）や地元に対する思い、グローバル化に対する主義主張といった話題になると、先ほどの「泣ぐ」とか「ニセゴ」というような有声化がより頻繁に出てきます。対照的に、経歴とか地域の変化とか子供の頃の話になると、有声化がぱったりと抑えられる、話題によってダイナミックなスタイルシフトが見られます。

中立派のご主人は、こうしたスタイルシフトはほとんど見られません。この曲線は、統計学的に有意ではありませんから、このご主人の力行子音有声化の産出によって、話す話題はあまり意味がないということを意味します。

賛成派のご主人は、反対派のご主人とほぼ同ようなパターンの曲線が描かれていますが、反対派のご主人ほどダイナミックにスタイルシフトを起こしてはいません。

こうした結果の社会言語学的解釈として、日頃から土着アイデンティティーが脅威にさらされていると感じている反対派のご主人は、この「力行子音有声化」という方言的特徴の採用によって、無意識ではありますが、自分の土着アイデンティティーを表示・強調する行為を行っているのではないか、あるいは、そういった方言使用を復興させたいという意思の無意識的な顕れではないかという説明が成り立つのではないかと考えています。つまり、アンケート調査とは少し違ったかたちの調査をしますと、日頃、その人が他人にはなかなかさらさないような、方言を用いた「アイデンティティー行為」が少し見えてきたりするということです。

反対派のご主人は、自分の方言を伝達手段とした「アイデンティティー行為」を、普段、日常生活のなかでもとても積極的におこなっている人だろうということです。賛成派のご主人は、方言を伝達手段とした「アイデンティティー行為」を、主に余所者向けの“意識的な”アンケート調査などであれば、ある意味こちらの期待通りに、方言使用をアピールしてくれますが、日常語のような“無意識的な”スタイルで話す

と、あまり方言は出てきません。ですから、なにかしら、一種、“建前的な”場面だと出てきますが、“本音的な”場面では、「方言の使い手」とは必ずしも言えない存在なのだろうと思います。最後に、中立派のご主人にとって、どのような場面でも、方言は「アイデンティティー表示行為」の手段とはなりえないということであろうと思われま

まとめ

これまで私が行ってきたニセコ町でのフィールド調査の成果の一部をご覧くださいながら、「ことば（方言）」と「アイデンティティー」の関係について考えてきましたが、「アイデンティティー」という概念はすごく複雑で、調べてみますと、たいへん複合的な構築物だということが分かってきました。“建前的な”アンケート調査などで示してくれるアイデンティティーの見せ方と、ごく自然な日常会話のなかで見え隠れするアイデンティティーの顕れ方と、なにか一個人のなかに併存といえますか、共存している実態が明らかになりました。それは、単発のアンケート調査や訪問だけではなかなか出てこない、把握しきれない、「ことば」と「アイデンティティー」の奥深い関わりの実際のところであろうと思います。

場面や求められる調査タスクによって複雑に揺れ動くアイデンティティー行為は、意識的回答(方言使用意識アンケート)と無意識的な日常語、普段のことば遣いの中で比較してみると、確かに結構な隔たりがあります。しかしながら、個々の話者の方言使用の中に見られるこのような隔たり（スタイルシフト）こそが、方言使用上のバリエーションにどのような規則体系が存在するのか、また、話者自身にとってそのバリエーションはどのような社会（心理）的意味を持つのか、そして、今後、ニセコで話されている方言はどのような変化の道筋を辿っていくのだろうか、等々の難問に答えるためには重要な手がかりになるのではなかろうかと思ひます。

まだ暫定的なところですが、例えば、今後、ニセコの方言を固持していくのは、おそらく地域のグローバル化に対して反対派の住民、「方言が危ない」「自分のアイデンティティーが危機だ」という意識を抱いている人々。そのような人々が、日常生活

の様々な場面で地元の方言を使い、維持していくのだろうと思います。アンケート調査では、賛成派の住民がたくさん方言を使うと答えてくれましたが、ニセコの方言を使い続けて継承していく人たちは、おそらくその人たちではないでしょう。日常的な場面で、自分の本心や本音をさらけ出す媒体として方言を使い続けているわけではないからです。従って、ニセコが今後さらにグローバル化し、様々なことばが混ざり合って共通語化が進んでいきますと、賛成派の人々もさほど拘りなく、歩調を合わせて変わっていくのではないかと思います。そして、共通語化の最先鋒となる人々は、おそらくは、地域の変化や自分自身の帰属などについて、あまり特定の考えや感情を抱かず、「今の感じで、このまま行けばいいんじゃない?」という中立的なスタンスをとる住民が、共通語化をどんどん受け入れながら、ニセコの方言の変化に拍車がかかっていくのではないかという構図を描いております。

最後になりますが、個々人のアイデンティティーがことば（方言）の揺れのシステムや変化の方向性に密接に結び付いていることは明らかですから、今後もその辺りはさらに検証されていくべきものだと思います。

謝辞

本調査にご協力いただいたニセコ町民の皆様がこの場をお借りし、心より感謝の意を表します。

【参考文献】

植松晃子（2010）

「異文化環境における民族アイデンティティの役割：集団アイデンティティと自我アイデンティティの関係」『パーソナリティ研究』
第 19 巻 第 1 号 25～37 頁

佐藤和之・米田正人（編著）（1999）

『どうなる日本のことば：方言と共通語のゆくえ』大修館書店

真田信治・ダニエルロング（編）（1997）

『社会言語学図集』秋山書店

高田利武・大本美千恵・清家美紀（1996）

「相互独立的一相互協調的自己観尺度（改訂版）の作成」奈良大学紀要
第 24 号 157～173 頁

ダニエル・ロング（1990）

「大阪と京都で生活する他地方出身者の方言受容の違い」

『国語学』162 集 76～89 頁

Cheshire, Jenny. (1982). *Variation in an English Dialect: A Sociolinguistic Study*. Cambridge: Cambridge University Press.

Garrett, Peter. (2010). *Attitudes to Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Labov, William. (1972). *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.

———. (1981). Field methods of the project on linguistic variation and change. *Sociolinguistic Working Papers* 81. Austin, TX: Southwest Educational Development Laboratory.

Le Page, Robert B., & Tabouret-Keller, Andree. (1985). *Acts of Identity: Creole-based Approaches to Language and Ethnicity*. Cambridge: Cambridge University Press.